

インホーナーショウ サーキュラー No21

1975年8月

目 次

I 大会時関係記事	1
II 第8回大会を終って	3
III DGD編集局より	4
IV 国際発生生物学会議について	4
V 研究所紹介	
“京都大学犬山壺長類研究所”	5
VI 団勝磨先生記念論文の寄稿について	7
VII DGDの充実のための基金の募集について (事務局)	8
VIII その他：会員の異動，寄贈図書など	9

日本発生生物学会

名古屋市千種区不老町 (〒 464)

名古屋大学理学部生物教室内

事務局よりのおねがい

1 会費納入のおねがい

会費は前納制ですのでS50年度会費未納の会員は至急御納入下さい。

郵便振替 名古屋42801

日本発生生物学会

年 4,500円

2 サークュラーの原稿をお寄せ下さい

サーキュラーは、年3～4回発行しておりますが、会員の方々からの投稿をお待ちしています。内容、および長さには制限しておりませんが、400字原稿用紙で5～10枚ぐらいが適当です。

(研究所の紹介、海外でのニュース、研究上のトピックスなど……)

インスタント人工海水

アクアマリン

姉妹品 ◇ ボースアクアマリン(海水魚淡水魚同時飼育剤)アクアマリンM
(人口海水用添加液)アクマリンK (海藻育成液) 其の他

八洲薬品株式会社 水産事業部

大阪市西区京町堀1丁目145 TEL (44) 3036・3037・2191
3038・3039・1422

I 大会時関係記事

§ 1 第13回運営委員会報告

運営委員会は、5月28日午後仙台市民慶会館において行なわれた。出席者は以下の通りである。

運営委員：江口吾朗 岡田節人 岡田善雄 酒井彦一 竹内郁夫 波磨忠雄 樋渡宏一

毛利秀雄 山名清隆 相山正雄 中沢信午（会計監査）

事務局より：大西英爾 緋田研爾 高橋 進

- ① 庶務報告：重要事項についてはサーキュラーに報告済みであるが、会員数については一時大巾な減少があったが、若干の増加がみられ、現在の会員数は509名である。
- ② DGD編集について：詳しい内容については後述するが、最近、DGDへの投稿論文数が著しく増加してきたため、将来、増加ページ、または、年6冊にする必要が生じてくるための予算的裏付けをどうするか、などが討論され、別項に扱われているようになった。
- ③ 51年度よりの学会の事務局について：第10回運営委員会の決定により、現在の事務局の任期はS50年度までであるので、S51年度よりの事務局探しを行っている。

§ 2 第8回総会

5月29日夕方、宮城県労働福祉会館において多数出席して行なわれた。議長は、大木健市氏（名大・教養）であった。主な報告審議事項は次の通りである。

- ① 49年度決算報告（別紙参照）が緋田会計幹事により行われた。中沢会計監査委員より帳簿を監査した結果、適正であることが報告された。
- ② 50年度予算案が成立した。（別表）
- ③ 岡田編集主幹より、DGD編集状況と将来の編集方針についての所信がのべられた。（編集局よりの報告参照）
- ④ 国際発生生物学会議についての報告が団勝磨氏及び、岡田節人氏により行われた。（後述）
- ⑤ 会員数増大及び寄附について、大西幹事長より、DGDの充実のための基金の募集についての運営委員会案が説明され、出席者の賛同を得た。（別紙参照）

⑥ 次回（第9回）大会について：日本発生物学会第9回大会は、大阪大学微生物病研究所において開かれることになった。

50年度予算案

収 入		支 出	
前年度繰越し	431,916	編集局経費	1,500,000
学会費	2,600,000	事務局経費	850,000
DGD売上げ	2,200,000	DGD印刷製本費	3,300,000
文部省助成	600,000	第8回印刷製本費	400,000
単行本売上げ	700,000	運営委員会費	120,000
DGD売上げ	150,000	サーキュラー印刷費	100,000
第8回大会委よりの辺却	300,000	第8回大会援助貸付	200,000
利息	30,000	第9回大会援助及貸付	150,000
		振替手数料	30,000
		借入金返済	297,000
		予備費	64,276
合 計	7,011,916	合 計	7,011,916

49年度決算

収 入		支 出	
前年度繰越し	1,446,896	編集局経費	956,863
学会費	2,089,851	事務局経費	631,965
DGD売上げ	719,208	DGD印刷製本費	4,689,220
文部省助成金	1,110,000	バックナンバー印刷費	158,000
岩波単行本売上げ	734,630	第7回大会講演要旨印刷	338,200
DGD広告料	75,000	運営委員会経費	104,025
基金より	200,000	サーキュラー印刷費	84,000
基金利息	6,612	第8回大会援助費	150,000
第7回大会主催者よりの寄付	772,197	振替手数料	25,980
利息	24,495	委員・会長選挙費	26,360
借入金	297,640	次年度繰越し	431,916
寄附金	500,000		
合 計	7,596,529	合 計	7,596,529

Ⅱ 第8回大会を終って

第8回大会は5月29日、30日の2日間、仙台市の宮城県労働福祉会館で開催された。今回はかなり講演申込みが多く、一般講演71題、参加者は146名であった。この時期は仙台でも最も快適な季節で、天候にも恵まれますがすがしい2日間であった。

大会の時期を早くするという前年までの努力をうけて、この大会は昨年より約20日早く、5月に開催することになった。したがって講演申込みの減少も危惧されたが、予想に反して昨年より10題以上も多くなった。前大会の経験から今回は2会場2日を目標としていたのに、かなりスケジュールがきつくと、結果として小集会のような試みは考慮することができなくなってしまったのは残念であった。

また今大会では、会期を早くしたことによって講演要旨集の編集にさく時間をかなりカットせざるを得なくなったが、どうしても予定の日程内で完成することができず、発送が遅れることになった。この点この欄をおかりして準備委員会から深くおびしたい。しかし要旨集の印刷が遅れた原因の一つには、最初の申込みの際の演題と、あとで送られてきた要旨の演題が大巾に(5.0%以上)違ってきたということもあげられ、この傾向は要旨提出の遅い方に多く、印刷に手間をとってしまったのである。このような無駄をはぶくためにも、また講演申込みのめ切りを少しでも遅くするためにも、講演申込みと同時にオフセット印刷用の講演要旨を受取るようにした方がよいのではないかと感じた。次開催地で是非検討して載きたい。

大会の会場は、我々としてはかなり余裕をみて用意したつもりであった。ところが蓋をあけてみると、いずれの会場も空席のない状態で、それが会期終了間際まで続いた。休憩室での討論も含めて、今大会がかなり熱のこもった大会の一つであったことがうかがえる。これは会場の便利さ(繁華街への)を考えあわせると、我々には信じられないことの一つであった。発生物学会のような小さな学会でのこのような“まとまり”は大切にしなければならぬと思う。が、一方今大会では正統発生物学会への回帰によってそのような“まとまり”がみられたとも思える。それが今大会だけの現象であり、傾向ではなかったことを願って筆をおく。

(第8回大会準備委員会)

Ⅲ DGD編集局より

1975年当初から6月15日まで期間に26篇の論文が主幹オフィスまで到着しました。第17巻3号までの編集を終了し印刷に回付しています。従って、本年に第17巻の4冊をお手許に届けることが可能だと思います。

第17巻3号には12篇の論文を掲載します。他に1975年3月に東京で開催されました“日仏発生生物学会議”の報告を加えました。これは会議主宰者からの申し出を編集委員会で検討し、通常の論文と同じ手続きを経て、経費主宰者負担で掲載するものです。今後、類似の申し出があれば委員会で各ケースごとに掲載するか否か検討します。

各位の御努力によりまして、DGDへの寄稿は増加の一途をたどっており、ますます充実したものになりつつあります。年間4回刊行は今後通常化できると思います。さらに、従来の計画であります。年間300頁では採用論文の収容が困難で少なくとも400頁は必要と考えられます。加えて、この程度の規模になれば年間6回刊行の可能性の検討を始める時期にきたのではないかとも思われます。これらは、いずれも学会会計と関連しており、学会の将来をさめる極めて重要な問題であります。この実情について会員各位の御理解をお願いすると共に、是非、御意見を編集局までお寄せ下さい。

なお、次回のDGD編集委員会は10月に開きます。以上の将来にかかる問題の検討を始める予定です。

DGD編集主幹 岡田 節人 (京都大学理学部 生物物理学教室)

Ⅳ 国際発生生物学会議について

1977年9月に東京で開催予定の国際発生生物学会議についての準備状況は、前回、前々回のサーキュラーで御紹介しておりますが、それらでお知らせしました以後の報告は次の通りです。

1) 会議はGeneral symposium, Discussion meeting, 一般講演の3つとし、初めの2つのテーマについて検討する小委員会(Co-chairmen: J. D. Ebert, 岡田)が本部直属で構成されています。適当なテーマ、その他についての御意見をEbert または岡田までお寄せ頂くよう、国際発生生物学会News letter および本会サーキュラーで広く御依頼しました。かなりの意見も集まりましたので、4月にWoods

Hole (アメリカ) でこの小委員会をもち討議しました。General Symposium のテーマはできるだけ広汎な問題をカバーし、しかも、一応の統一性をもったものによる必要があり、種々論議の結果“Initial Changes in Development”というタイトルで、受精、遺伝子発現、細胞分化、発がんなどの要因をできるだけ統一的に論じる、という方向でさらに具体的検討を進めています。Discussion Meetingのテーマはだ充分につきつめていません。以上のような現状であります。なお、今後引き続き検討を続けますので、御意見をEbertまたは岡田までお寄せ下さい。

2) 今秋に1977会議の第1回のCircularを刊行する予定。

8) この会議は日本学術会議主宰により、国費援助を申請していましたが、このことは極めて困難な情勢にあり、財政的には非常な難しさを伴うと予想されます。御支持の程お願い申し上げます。

なお、会議の日本側準備の代表は団勝磨先生、幹事は寺山宏先生(東大・理・動物)です。疑問の点はどしどしお尋ね下さい。(岡田節人記)

V 研究所紹介

京都大学霊長類研究所 (Primate Research Institute, Kyoto University)

京都大学霊長類研究所は1967年に設立され翌1968年愛知県犬山市に研究棟が棟立ち本格的な研究を開始した。当初は形態基礎、神経生理の二部門であったがその後増設され現在では9部門2施設に至っている。京大附属ではあるが京都より遠く離れており、また犬山という小都市にあるため、交通の便は悪く、文献集収、情報交換等に不便を感じることも少なくない。研究所の周りには山と田園が広がり、空気は清浄で健康的な環境にあり、すぐ裏には日本モンキーセンターとその研究所が立っていて世界のサルを一望できる。霊長研自身日本モンキーセンターと混同されることがしばしばある。霊長類研究所はまた共同利用研究所の一つでもあり毎年正月頃全国に共同利用研究員の募集が行なわれる。日本各地のニホンザル生息地で、社会・生態の研究を行っている人は多く、さらにまた神経生理・生化学等の実験系も含めて毎年60名以上の研究員が訪ずれ夏休み頃はその往来で特ににぎわう。また外国人研究者の来訪も多く短期間、長期間を含め年間数名の滞在が見られる。大学院は京大動物学専攻霊長類分科として設けられており、1972年より院生が入っている。霊長類の社会・生態研究は野外ニホンザルを餌付し、その顔を覚えて個体別するという日本独自の

研究法により世界に誇るべき多大の成果を生んだ。現在の霊長研ではニホンザルのみならず世界のサルの研究にも力が注がれており、アフリカ、インド、東南アジア、南米等のサルの生息地で調査が行なわれている。霊長研で生態関係の仕事にたずさわっている研究者は約半数に及ぶが、毎年数名が海外調査におもむいている。大学院として入ってきた学生が研究者とともに海外調査に出かけていくのもこの研究所の特色であろう。生理・生化学分野での実験動物としてのサルはそれがヒトに近縁であり、得られたデータが人間の生物学、特に医学上の問題に多くの示 を与えることが期待される。脳の神経生理学的、生化学的研究はまさにサル類を使う強みが発揮されるところである。当研究所は今年で設立されて8年目に入った。系統部門の新設で部門増設計画は終了し、今後ニホンザル研究林、繁殖コロニー、情報資料センター等の附属施設の充実に力が注がれる。霊長研の各部門施設の簡単な紹介を以下に記す（設置順）。

形態基礎部門：サルからヒトへの進化と四足および二足歩行との関連、また歩行運動の機械学的研究がなされている。さらにニホンザルなどの化石の形態学的比較研究、アマゾン領域の新世界ザルの系統分類学的研究が行なわれている。

神経生理部門：前頭葉の機能が微少電極を用いた脳手術、コンピューターを用いたデータ処理によって明らかにされつつある。材料としてアカゲザルが多く使われており遅延反応を学習していく過程でのニューロン活動の変化が追求されている。

心理部門：霊長類の知覚・学習・動機づけ・社会行動に関する基礎的研究を進めている。脳切除による視覚情報伝達の機構、また視覚記憶部位の決定など、神経生理部門と共同で行なわれる研究も多い。

社会部門：霊長類の個体・群れ・地域集団レベルでの社会構造の研究がなされている。日本各地の野生ニホンザルの分布調査、群れ社会の研究のため野外に出ることが多い。環境破壊、サル捕獲などがあいつぎ自然保護の問題も大きくクローズアップされている。アフリカでゲダラヒビ、チンパンジーなどの生態研究も行っている。

幸島野外観察施設：幸島は宮崎県串間市にある小島である。霊長類研設立以前から多くの研究者が訪ずれていた。現在100頭以上のサルがいるが、ここのサルに関しては全戸籍簿、家系図が完成しており全社会、生態的研究が密度高く進行している。

変異部門：ニホンザル血液タンパク質を電気泳動法で分離し、集団遺伝学の立場からその遺伝子構成、集団有効サイズなどを研究している。またサル類の頭骨の諸形質を調べること、さらにニホンザル、アマゾン流域のサル類の行動生態なども他の生態系部門と共同で調べられている。

サル類保健管理施設 : サル類精子の微細構造の解明, また雄の性機能全般に関して精巣組織化学, ホルモン定量などがなされている。また研究部門に供給するサルの検疫, 管理, 繁殖用サルの維持なども重要な仕事である。

生活史部門 : 霊長類の社会, 生態学的研究がなされており社会部門と密接な関係をもつ。ニホンザルのみならずインドのハヌマンラングール・エチオピアのゲラダヒヒ・アフリカ狩猟民族ブッシュマン, ピグミー族など多彩な社会を扱っている。

生理部門 : ニホンザルがサル類として北限に住むことはよく知られたことであり, 冬の積雪の中で生活しているサルの体温調節は重要なテーマとなっている。またニホンザルはサル類では珍しく夏期不妊であり, その生理的解明, さらに雌の分娩時の子宮電位変化などを調べている。

生化学部門 : 霊長類の各種臓器の酵素, とくに肝臓のタンパク質分解酵素, 解毒酵素, 胃ペプシンの精製と性質の解明を行っている。またヘモグロビンの個体発生時の変化を調べている。

系統部門 : 1975年10月新設の予定でありその研究内容は現在決っていない。
(文責 景山 節)

VI 団勝磨先生記念論文の寄稿について

前発生物学会会長, 団勝磨先生は, 本年をもって70才を向えられました。前会長であり, 永く本会欧文誌の刊行に貢献されましたことは, さておく致しませんが, 先生の発生物学会における業績は誠に巨大というべきであり, その学風を慕う研究者は世界中に多数であります。70才を向えられるに当たり, 私共は自発的になんらかの記念の行事を企画したいと考えました。つきましては, この際御意見のある方から先生にdedicateする論文をDGDに投稿され, これをもって記念の一つとしたいのであります。学会長, DGD編集委員と相談しました結果, 次のような要領で実行に移したいと存じます。御協力, 御支援をお願いいたします。

要 項

- ① 記念論文として寄稿される方は論文第1頁にその旨を記すこと。
- ② 特集号を発刊するのではなく, Vol. 17, №4~Vol. 18, №3までに記念論文を印刷する。記念論文の受け付けは, 一応1976年5月末までとする。
- ③ 掲載までの手続は, 記念論文である理由で特別扱いはしない。また, 記念論文の発刊

により、一般論文の発刊が遅れることがないようにするのは、もちろんです。

④ 記念論文の印刷費の半額は著者負担とする。

⑤ Vol. 17, №4 or Vol. 18, №1 に適当な方に、団先生を記念する2頁程度の記事を依頼して掲載する。

発起人 金谷晴夫（東大・海洋研），毛利秀雄（東大・教養），

岡田節人（京大・理），岡崎嘉代（都立大・理），

酒井彦一（東大・理），米田満樹（一ツ橋大）

※疑問の点は、発起人にお問い合わせ下さい。

Ⅶ DGDの充実のための基金の募集について

別項で扱ったDGD編集主幹の記事に見られますように、DGDに投稿される論文は増加の一途をたどっております。本年度予算は年間頁数320頁（昨年度は280頁）を基にして立てられておりますが、近い将来には年間400頁と増頁を迫られることが予想されます。このように充実された暁には、外国の購読者数も増加し、又、文部省の刊行助成金の増額も見込まれますので、収入もそれなりに増加すると思われれます。頭の痛い問題は、そのようになって安定するまでの財政的裏付けをどうするかであります。現在の当学会の財政は、別項の49年度決算ならびに50年度予算で明らかなように、かなり緊迫したものであり、たとえば、純事務的経費は類似の学会に較べ極度に切りつめられており、予備費、あるいは運用資金の如きものを準備する余裕は全く無い状態であります。このような財政上の困難は、会員数の約500名という小世帯であることにも起因しております。上述のようなDGDの充実のためには、当面、印刷・製本・編集・発送などの増加のために、通常経費に加えて、更に150万円ほどが必要と思われれますが、これだけの額を一般会計において捻出することは極めて困難と思われれます。5月28日の運営委員会におきましてこの問題が検討された結果、次のような結論に達し、この案はつづいて5月29日の総会に提案された承認を得ました。

① 財政的基盤を強化するため、会員数の増加に努めること。会員の周囲に発生生物学に関心をお持ちであり乍ら会員でない人がいましたら、是非勧誘して下さい。1人でも増やすことが、DGDの強化につながります。

② 会員から、1口1,000円の寄附を募集すること。この寄附金は、一般会計とは別個に積立てて基金をつくり、この基金はDGDの強化と充実に関連する支出にのみ充当するものとします。

なお基金の申込先および方法は以下の通りです。

1口 1,000円(1人何口でも可)

払込先 郵便振替名古屋42801

日本発生生物学会

(振替用紙の裏面に“DGD基金”と明記して下さい)

Ⅷ そ の 他

1 会員の異動

<新入会員>

氏名	所 属	テ ー マ な ど
浅島 誠	横浜市立大・生物	①イモリ胚の誘導現象の解析 ②アカハライモリ
浅田 真理	京都大・理・動物	①マウス胸腺 reticulum cellsの培養 ②マウス
市村 浩	東京大・教養・生物	①植物の生長調節, 形態形成
漆原 秀子	京都大・理・生物物理	①細胞接着 ②主としてBHK Cell
彰山 哲男	京都府立医大・生物	①形態形成運動のメカニズムの解析 ②メダカ, 他の魚Xenopus laevis, Cynopus Pyrrhogater, 他の両生類
加藤 洋一	癌研究所・実験病理部	①carcinogenesis, cell culture in vitro, pattern regulation in hydra, ②Rat, Mouse, Hamster, Hydra
河原 明	九州大・理・生部	①分化における核酸合成の調節 ②アフリカ
窪田 友幸	鹿児島大・教養・生物	①ツメガエル細胞分裂の機構 ②イモリ
久保田 洋	京都大・理・動物	①両生類の初期発生 ②Xenopus イモリ
栗原 一茂	九州大・理・生物	①第一次誘導 ②アカハライモリ
慶野 裕美	心身障害コロニー発達障害研	①哺乳類初期発生 ②CFI mouse
坂口 文吾	九州大・農	①細胞分化と遺伝子の作用
佐藤 隆	京都大・原子炉実験所・第6部門	①細胞間相互作用に対する放射線効果の解析 ②細胞性粘菌 (Dictyostelium discoideum他)
佐野 清	東京大・教養・生物	①形態形成・分化にともなう細胞表面の変化

氏名	所属	テーマなど
沢井 毅	山形大・教養・生物	①両性類卵の卵割溝形成 ②ウニ ③アカハライモリについて
志村 保雄	名大市・医・第一解剖	①内分泌器官の発生 ②マウス・ラット・カエル
鈴木 博	横浜国大・理科教育実習施設	①十脚甲殻類の性徴に関する研究 ②寄生虫又は共性エビ・カニ類
高谷 博	甲南大・理・生物	①両生類の中樞神経系の部域化の分化 ②イモリ, アマガエル
田中 彰	奈良女子大・理・生物	①ゴキブリ類の発生生物学 ②チャバネゴキブリ
田中 徹哉	九州大・理・生物	①両生類胚の一次誘導と水晶体誘導 ②イモリ
田中裕一郎	名大・理・臨海実験所	①ウニ卵における小割球形成機構の解析 ②ウニ
栃内 新	北海道大・理・動物	①免疫能の個体発生 (特に胸腺との関係) ②アフリカツメガエル
中橋 孝博	九州大・理・生物	①発生におけるRNA代謝 ②アフリカツメガエル
野田 幸一	東京都市老人研究所電顕室	①ヒドラの形態形成 ③ヒドラ
野田 伸一	〃 〃	①第一次誘導 ②アカハライモリ
林 盛昭	京都大・理・動物	
藤波 昇	〃 〃	①メダカ初期胚解離細胞の周転運動
藤原 昭子	早稲田大・教育・生物	①ウニの形態形成におよぼす細胞内物質の影響 ②ウニ (バフン・ムラサキ・アカ)
安田 国雄	京都大・理・生物物理	①細胞の接着物質の分離 ②chick embryo, BHK cells
山道 祥郎	東教大・理・動物	①カプトガニの胚形成について ②Tachypleus trideutatus
吉里 勝利	北里大・医・形成外科	①コラーゲン合成及び構造 ②両生類・哺乳類
若松 佑子	京大・教養・生物	
渡部 真三	大阪大・医・第二解剖	

<賛助会員>

和研株株式会社

京都市左京区北白川西伊織町25

<退会会員>

川上 いつゑ

京都女子大

菅野 延彦

富山大・薬・生物薬品製造

茶 谷 文 雄
豊 島 久美子
米 川 博 通

名大・理・生物
塩野義研究所726号
東京教育大・理・動物

2 寄贈図書

Practical Studies of Animal Development
— F.S. Billett & A.E. Wild — Chapman and Hall

Cellular Interactions in Animal Development
— Elizabeth M. Deuchar — Chapman and Hall

CYTOLOGIA (Vol.39, No.3, Sept. 1974)

" (" , No.4, Dec. ")

" (Vol.40, No.1, Mar. 1975)

" (" , No.2, Jun. ")

— ACTA ZOOLOGICA SINICA

(Vol.20, No.4, 1974)

OKAJIMAS FOLIA ANATOMICA JAPONICA

(Band 51, Hef 4, Seite 131 ~ 218)

OKAJIMAS FOLIA ANATOMICA JAPONICA

(Band 51, Heft5, Seite 219 ~ 284)

OKAJIMAS FOLIA ANATOMICA JAPONICA

(Band 51, Heft6, Seite 285 ~ 358)

THE BIOLOGICAL BULLETIN (Vol.147, No.3, Dec. 1974)

THE BIOLOGICAL BULLETIN (Vol.148, No.1, Feb, 1975)

MEDICAL BIOLOGY (Vol. 52, No.6, Dec. 1974)

ANNALES ZOOLOGICI FENNICI (Vol.12, No.1, 1975)

賛助会員

三菱化成生命科学研究所

東京都町田市南大谷 11 号

賛助会員

和 研 薬 株 式 会 社

京都市左京区北白川西伊織町25 電話 京都 (075) 721-0491(代)